

出船おくり

8月17日には、5ヵ月ぶりに漁に出る漁師さんを送り出す出港式を、総勢60名で行った。

出港の際に色鮮やかに染め上げられた大漁旗が掲げられ、家族や関係者が色とりどりの紙テープと軍艦マーチで、航海の安全と大漁を祈りながら見送った。市内のホテルの女将さんらでつくる「気仙沼つばき会」の皆さんも揃いの衣装でお見送り。長い航海に向かう船員さんたちを笑顔で激励する姿、「いってらっしゃい!」と手を振り続ける姿に、どこか胸にくるものがあった。

震災をふりかえり

気仙沼で支援活動をしているボランティアは、ほとんどがテント生活だった。我々は長期間にわたる支援活動を目的にしていたので、昼のある拠点を確保できたのは本当によかったと思う。

日本は今まで、経済を優先する生き方をしてきた

が、生き方や信念を見直す機会をつくらなければ、今回犠牲になった方々にも申し訳ないと思う。次の時代をどう築いていくか、私たち日本人全員が試されていると感じている。

この大震災を、ライフスタイルを見直すきっかけにしていきたい。1人でも2人でも、住民の心の中に今回の支援活動が残ってくれたらいいと思う。



撮影：2011.8.17 大震災後5ヵ月ぶりの出船おくり

大学

ボランティアを支えるためのボランティア、組み立て式風呂の支援。

三沢市

相馬 孝 小川原湖自然楽校 代表

取材日 2011.10.20

小川原湖での自然体験を通しての環境教育を目的に、自然体験活動や自然体験活動指導者養成に取り組む。震災後はRQ市民災害支援センター・登米現地事務局の立ち上がりから震災ボランティアとして関わる。自らのボランティア経験から支援活動に従事するボランティアのための支援が必要と考え、活動環境を整備するなど裏方支援を行った。

3月11日 14時46分

弘前で亡くなった叔母の通夜の準備をしていた。大きく揺れたが、恐怖を感じるほどの揺れではなかった。ただ、横揺れがずっと続いたため今までの地震とは違うと感じた。

青森でもすぐに停電になり、雪も降り、暖房もつかない中、ロウソクだけで通夜を取り行った。翌日は地元に戻り、13日に電気が回復した。テレビなどを通してだんだんとあちこちの被災状況が明らかになるにつれ、これは大変な出来事が起きていると思った。

野外活動に取り組んでいる手前、ライフラインがとまっても生活に支障はなかった。

皆は電気の生活に慣れてしまっているため、ストーブもファンヒーターなどを使っている家庭が多い。12日の夜に帰って来た時、「ストーブがつか



けられなくてとても大変だった」という話を聞いた。自然楽校にはストーブが4つあるので、ランタンと一緒に貸し出した。

水も止まったがペットボトルのとりおきもあり、冷蔵庫の中には常時1週間ほどの食糧が入ってい

る。冷凍庫にもたくさん詰め込んでいたため、かえってそれが良かったようだ。電気が止まっても互いに互いを冷やしてくれた。

被災地へ入り…

13日に叔父が気仙沼に戻ったが、すぐに食糧を送ってほしいとSOSが来た。車も満足に動かせないような状態で、従兄と一緒にトラックをチャーターし、北海道から物資を取り寄せ燃料を積み込み、出かけられる体勢が整ったのは19日のことだった。

気仙沼からの帰り道、陸前高田を見ておこうと立ち寄った。そこで大きなショックを受けた。第二次世界大戦が終わった時の、東京の焼け野原のイメージだ。あれみたいに何も無い状態ではなかったが、建物はすべて崩壊し、瓦礫の山があり、これは地震ではなく戦争だなと思った。

支援活動

登米に拠点を置いたRQ市民災害支援センターの立ち上がりから手伝った。最初の仕事は荷物のデリバリーだ。行政の支援から漏れているような、避難所になっている個人宅などを探して物資を届けることが当初の目的だった。行った先であそこにも避難所があると聞けばそこへ行き、何が無いと聞けば午後には届けた。

自分はもちろん、手伝いに来ている人達は4日も5日も風呂に入らないで帰る生活だった。これは風呂を作らなければなどと思ひ、組み立て式の風呂を作って持って行った。

ボランティアに来る人達のスタンスもいろいろで、長く手伝ううちに違和感を感じ始めた。全然知らない人同士が1週間など長いスパンで一緒に動く。ボランティア人数が増えるにつれて、自分達の活動とはあわないと思うようになった。それで同じRQでも単独で動いていた歌津などの手伝いに行くようになった。

歌津は電気もなく、夜は太陽光発電のLED照明という暗い中で打ち合わせをしていた。たまたま一緒に現場へ行った職員が元大工だと話をしたら、RQ歌津のスタッフは目をランランと輝かせていた。その頃は支援物資が入っていた段ボールを机代わりに写真クリーニングをするような有様だった。それで机を作るなど、裏方のための支援を行った。支援活動はRQだけに特化せず、釜石地域で活動をしていた北海道のNPO「ねおす」など、別の場所にも手伝いに行った。

自分達が動くよりも、ボランティアを支えるためのボランティアの方が自分達の活動にあうと思った。組み立て式風呂の支援もその1つだ。



撮影：2011.5.28 RQ歌津朝のミーティング

防災教育

一般的に言われている「防災教育」は、ハザードマップ作りが多い。小川原湖自然楽校では毎年「防災キャンプ」を開催しているが、動きそのものは普通の体験活動となら変わらない。環境教育は自然体験なくしてはありえないと思っており、防災教育はいつもしている自然体験の延長線にあると考えている。

震災を振り返って

現在の生活は電気にどっぷりつかってしまっている。国が原子力政策を推し進め、地域産業がなく雇用のない土地では受け入れざるをえない状況もあった。これからは、果たしてそれで本当に良かったのか、皆で考えなければいけない。原子力が本当に安全かどうかという議論は今に始まった問題ではない。世界の人達がやったことがないパンドラの箱を開けてしまったことは、どうしようもないことだ。これからは多少なりともコントロールできるようになってくるとは思うけれども、もっと先の話だろう。

ただ闇雲に危ないからダメと言うのではなく、目の前のものをどううまく使っていかをもっと上手に考えていけばいいと思う。自然エネルギーにしても良い部分だけを見て、良い部分だけをPRすることには反対だ。例えば青森県では南部と北部では日照時間が違うから、一様に太陽光発電を導入すべきではない。オール電化の家は電気が止まった場合のことを考えられていないし、そもそもなぜそんなに電気を使わなければいけないのだろう。ストーブにしてもそうだ。灯油以外に薪ストーブもあるし、最近ではペレットストーブも出てきた。

さまざまな負の部分もよく見て、メリット・デメリット両方を考え、それでも必要だというものを導入して欲しい。